戦いと敗北

リカルダ・フーフ　著
梅内　幸信　訳・注

ユスティーヌス・ケルナー[1]は、かつて次のような所見を述べている。つまり、似非合理主義が、前の世代、すなわち自分が生まれる十年から二十年前に開花し、その最盛期をフランス革命時に迎える世代にのみ依存していることは驚くべきことではあるが、それは自然の理に基づくものであり、当然の結果として、今のロマン主義と哲学は、個々人にとってではなく、時代にとって重要なのである、と。

最初のロマン主義者の誕生は六十年代半ば以降に当たり、次の世代のロマン主義者の誕生は八十年代の半ばに当たっている。一七九〇年以後は、散発的に追随者が現れるに過ぎない。従って、すでに一八二〇年頃には成長してきた新たな世代の似非合理主義者が、古い世代の代表者に出会い、後者の手から滑り落ちた武器を拾い上げたのであった。ロマン主義者たちは、最初から戦士であった。彼らは、新たなるものを宣言すると同時に、古きものに戦いを挑み、攻撃したのであった。しかし、彼らが勝利を占めるや否や、勝ち誇る新たな敵対者たちと対峙し、今やこの敵対者たちが今度は攻撃し、ロマン主義者たちを防戦へと駆り立てたのであった。そうこうするうちに、いつしかこの状況は逆転し、若さと活力、それに伴ってついには正義までもが「似非合理主義者」ないし「物理屋」に移り、老いと凋落がロマン主義者に乗り移ってし

まったのである。

シェリング[2]とシュレーゲル兄弟[3]は、イェーナにおいて輝かしい勝利を占めていた。若者たちは、自らがまだ若いこれらのロマン主義者たちの所へと殺到し、その芸術と学問、そして人生は、ロマン主義の色彩を帯びていた。敵対者たちは、憤りながらも、なす術なく傍観せざるをえなかったが、だからといって、抵抗しなかったわけではない。合理主義神学者のパウルス[4]は、イェーナにおける注意散漫なロマン主義者たちの行く所ならどこにでも付きまとって、彼らの邪魔をし、もっと大きな打撃を加えられるチャンスを狙ったのである。一八〇二年に、北方から「合理主義者の大異端審問官」である老フォス[5]が、イェーナにやって来た。イェーナの街は、まだロマン主義的ヴァルトホルンの音色を反響していた。しかし、その反響が四方の丘の上に漂っていた、ある種の刺激的で麻痺させるような雰囲気のゆえに、イェーナの街は冷静なフォスにとって、堪え難いものとなったのである。束の間躊躇したものの、フォスは、一八〇五年の夏に、バーデン大公の招聘に応じてハイデルベルクへ赴いたが、その豊かな自然の只中で、ことのほか満悦していた。クロイツァー[6]以外には、いかがわしい人物は見当たらなかったが、そのクロイツァーでさえ彼には、自分よりはるかに若く、大変慎ましく、内気な印象を与え、一見御し易く見えた。ブレンターノ[7]とアルニム[8]もまた、今や相前後してハイデルベルクにやって来たばかりではなく、後にフォスが用いた表現にならえば、彼らはむしろ巣造りをし、「大抵は、石榴色（ざくろ）に火花を散らすオリエントと南方の陽光へのおぼろげな観念に浮かれ騒いでいるだけで」、それゆえフォスには、確かに滑稽ではあるものの、しかし、無害なものと思われたのである。実際フォスは、ブレンターノとアルニム、とりわけアルニムの方に共感すらもっていたが、しかし、それ以上に二人の方が彼に共感を抱いていたのである。というのも二人は、直接民衆の中から現れ、素朴な農夫の、自然力溢れる雰囲気に包まれたフォスの外見に対して、ひたすら理解と愛着を覚えるのみであったからである。クロイツァーは、夕暮れ時にフォスの姿を時折見かけたものであったが、彼は人間として、また、一家の父親とし

て非常に尊敬に値するように見えた、と述べていた。そしてブレンターノは、才能があって活動的でいながら、全くわざとらしさのないフォスのエルネスティーネ夫人に対して心からの愛情と尊敬の念を覚えたのである。

しかしながら、やがて判明したことは、農夫が農夫たるゆえんは、洗練された文化人の目から見れば、自分の憧れている自然そのものだという点にあり、自己の見解を主張し、それを文化人たちに押しつける農夫などではないということであった。フォスのロマン主義者たちに対する反感の中には、気球や自転車がうなりを上げて通り過ぎるのを見るとき、即座にその乗り物を、それに乗っている旅行者もろともたたき壊してしまいたいと思う、そういった農夫の破壊的な憤激が幾分潜んでいた。ロマン主義者たちが自分たちの理念を一層声高に述べ始めるや否や、フォスは彼らが自分とは異質の人間であることに気づいた。つまり、自分より高い文化段階にあるものの、自分に先んずることによって、自分には残っている活力と健康を損なってしまった人間であることに気づいたのである。ロマン主義者たちが勝ち得たものをフォスは評価しなかったし、また、彼らが失ったものを理由にロマン主義者たちを軽蔑したのである。さらに、素性による対立点もないわけではなかった。アルニムは貴族であったし、身分の高い南ドイツ人とイタリア系ユダヤ人の息子であるブレンターノと、低地ドイツ生まれの農夫の息子であるフォスとは、全く共通点はなかったのである。ブレンターノのごとき人間は、笑い者にして小馬鹿にすれば、簡単にやりこめられると、フォスは考えた。それよりも対応に難しいのは、ゲレス[9]であった。というのも、彼の現代流の考え方は、健全で素朴な、確固たる天性から生まれていたからである。そこでフォスは、ゲレスを最も危険な敵対者として憎んだのであった。

慎ましく、天才めいたところのないクロイツァーは、あれこれ考え続けることができたかも知れないし、アルニムとブレンターノは、子どもじみた韻律で歌い続けることができたやも知れない。彼らは、「もじゃもじゃ髭の間諜」ゲレスが、「古代ドイツ人風の、茂みのような髪の下に、目を落ちつきなく動かし」、彼らの先頭に立つことによって初めて、重要な

存在となったのである。この点において、フォスの勘は誤ってはいなかった。実際ゲレスは、その小さな群れの魂であって、その人格によってばかりではなく、その理念によっても仲間たちを感激させた。確かに、ゲレスは創造者ではなかったが、しかし、クロイツァーの名前と分かち難く結び付いている象徴学の提唱者であることは、間違いない。

ゲレスは、当初「聖なる調和」というロマン主義的理念を明晰な言葉でもって宗教に応用していたが、それは、諸々の宗教間における関連と、それらの宗教が一つの同じ原初の宗教から由来しているという仮定に基づいていた。永遠という深淵において、神性それ自体は、なんら歴史をもつものではなく、歴史的時代に入って初めて神性の歴史は始まると、ゲレスは教えている。「歴史は、神性にとっては俗世の人生である。それは、内的にして神的な人生の濁りなき平穏の内部で、大河となって轟音を立てて流れゆくのだ。そして、内的にして神的な人生が、なんら年齢や転機というものを知らず、昼夜に分かたれず、年代と世紀に分かたれないのに反して、俗世の人生は、まさにその無限さゆえに不滅のものであるにもかかわらず、果てしのない転身のあらゆる形態を突き抜けてゆく運命にある。」従って、あらゆる時代に当たって神性の理念は同じであったが、反射した神の観念は同じではなかった。つまり、神性の観念は無制限に成長し、宗教の外的な具体化は宗教と共に進展し、時代時代にはそれぞれの預言者が存在して、その時代の言葉で語った、というわけである。しかしながら、このロマン主義者ゲレスにとって重要であったものは、古代オリエントにおける諸民族の発言であった。というのも、その言語の中には四大元素の余韻がなおも続いており、その言葉は稲妻のように予言的な夢の中から立ち現れ、とりわけ、より高い真実の啓示となっていたからである。これに反して、ゲレスの見解によれば、古代ギリシアの時代において人類はすでに目覚め、そして、欺くことのない直接的な夢の観念を最早彼らは持ち合わせていないと言われる。パサヴァン[10]は、こう言った。「一方、自然研究者たちが、ギリシアやローマの智恵に満足せず、一層厳格な母親を、まさしく精神と自然のもつ誤解された諸々の力が、古代の伝説と慣習において今日に至るまで見いだされるオリエントに求め

たのも偶然ではないのだ」と。

これらの考えは、信心深いキリスト教徒たちばかりではなく、ギリシアを愛する人々においても矛盾をきたすこととなった。つまり、前者の人々は、キリスト教とその他の宗教との間に一つの本質的な相違を措定し、このキリスト教を、例えばアーダム・ミュラー[11]のように、〈一つの〉宗教ではなく、宗教〈そのもの〉と見なすことができると主張したのである。また、同様にしてヘレニズム研究家たちは、ギリシア文化を独自のもの、原初のもの、なにものによっても規定されないものと考え、これを、まさしく美の最初にして神的な現象として、形態ももたずに横溢するオリエント文化に対置したのであった。

クロイツァーは、ゲレスの理念に触発されて、古代のあらゆる民族における宗教的象徴の関連を、とりわけギリシア神話が一層古いオリエントの神話に依存していることを示すという課題を提唱したが、これによってクロイツァーは、自分の最も得手な領域においてフォスに挑戦したのであった。フォスにとって、彼が作り上げ、告知していたギリシア観を埋没させまいとする意図は、彼の個人的虚栄心からくる事柄であった。フォスは、神々の住むオリンポス山をプロテスタント的にして、啓蒙的に扱った。つまり、神々の世界は美しく澄み、大理石でできていて、秘密も深淵もないのであった。ロマン主義者たちは、ギリシアの神々をオリエント化しようと欲した。フォスとヴィーラント[12]によってギリシアの神々は、通俗性と「心情を欠く優雅さ」を獲得したが、これがロマン的心情の人々に反感を抱かせたのであった。ゲレスとクロイツァーの活躍がなければ、シュッツ[13]は一八四一年に、ヘレニズム文化は、プロテスタントよりもカトリックの方に親近性をもっていると主張できなかったであろう。ゲレスとクロイツァーを通じて、ギリシア文化が古代オリエントの理念を伝えながら、ある意味でカトリックと関係づけられたということ、まさしくこのことがフォスを最も憤激させたのであった。フォスが学校において、格別人間を陶冶するものとして、ギリシアの歴史と文学に主たる重点を置くことを主張したとき、

彼は当然のことながら、プロテスタント的で自由なドイツに適合させられたギリシア文化を用いていたのである。まさしくこの文化が、彼がドイツの若者に役立つと考えた理想を教えていたのであった。突如として、自分の学校計画と一致し難いギリシア人とその神話に関する事柄が主張されたこと以上に、フォスを憤慨させるものはなかったのである。また、ゲレスとクロイツァーが提出した見解は、すべてが文字通りに証明されるものではなく、普遍的な見地から組み立てられ、天才的感覚によって予感され、人間の空想力によって探求されなければならなかったので、あっさりとそれらの見解に詐欺の烙印を押す方が、極めて簡単かつ妥当な方法であった。フォスは、沢山の事実を寄せ集め、説明することで満足した。が、クロイツァーにとって諸々の事実は、それらが理念をもたらすもの、すなわち一つのより高い統一へと関係づけられる象徴となるときにのみ価値をもつものであった。その際色々と謬見が入り込んでいたことが、フォスに、自分の敵対者たちを、僧侶支配に仕える軽薄な詐欺師と呼ぶ格好の機会を与えたのであった。というのも、「学問の固い殻を文献学的にかじり取る」フォスにとって、諸々の宗教の有機的関連という考えとその意義は、完全に未知のものであったので、彼にはその考えが、後ろめたい目的を蔽い隠すごまかしの手段であるとしか思えなかったのである。

フォスがロマン主義運動をどれほど誤解していたかは、次の事実からも分かる。つまり彼は、ベルリーンでフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の周りに集った「信心家並びに奇跡の宗派」をロマン主義運動の出発点と見なし、同じように彼らの目標が「教皇制度を礼賛する秘儀の伝播」にあると考えたのである。フォスは、この秘儀にユング・シュティリング[14]と、「奸智に長けた僧侶たちの計画を悪意なしに促進した」ラーヴァーター[15]をも結び付けてしまったのである。これよりはるかに正しかったのは、フォスがロマン主義の哲学的萌芽をカント[16]とフィヒテ[17]の中に見たことであった。「仮説を立て、自己を〈構築する〉理想主義的思想家がこのように増加し、彼らと、これまた増加する理想主義的詩人たちは親交を結んだが、この詩人たちの理想と野性的にして原初的叫び、粗暴な力をもつ中世の原始的芸術は、ロマン主義の名の下に

ローマを礼賛したのである。……活力のある若者が仲間に加わるよう、公然と招かれた。保護を必要とする若者たちが、御供となって付き従った。そして、ついに一八〇七年に、頭目であるヴィルヘルム・シュレーゲルが、声高な叫びでこう告げ知らせたのである。僧侶時代を若返らせ力強くするために、『気高い人間による目に見えない共同体を作ろう』、と。」

フリードリヒ・シュレーゲルは、ある一つの詩の中で、詩人の目標と本分は、「騎士文化が敬虔さと結び付いていた」時代におけるドイツ人の名の英雄的栄光を再び打ち立てることであると書いた。もちろんこれは、純粋に愛国主義的な性格のものであった。しかし、ヴィルヘルム・シュレーゲルがその詩や他の詩のために予め送っていた解説と推薦のための批評を、フォスは真剣に、「領主と民衆にとって好ましくない夜の太陽を造り出す」ための、「良俗に反する」同盟が存在していることの証明であると考えたと思われる。興味深いことは、ロマン主義者たちが、あらゆる事柄における有機的関連を認識し、すべての現象を無意識から説明しようと努めたのに反し、彼らの敵対者であるフォスは、至る所で意識的な目標を求めていたということである。犯罪的な意図があると思い込んだことによって、フォスは敢えて、確かに滑稽ではあるものの、しかし、野卑で並はずれた悪口雑言に訴えたのであった。

フォスの最初の公の攻撃は、アルニムとブレンターノの民謡収集に関連して行なわれた。フォスは、「隠者新聞」の中で彼らに攻撃されたと思ったのであった。つまりフォスには、ロマン主義者たちが、単にオリエント文化ばかりではなく、民族文化や古代ドイツ文化によって自分のギリシア観を威嚇していると思われたのである。『ニーベルンゲンの歌』は、ホメロス[18]がギリシア人に対してもっていたのと同じ意味を、ドイツ人に対してもちうるであろうとアルニムが言ったとき、フォスはこれに対して、それは宮殿を豚小屋と比較するようなものだと応じたのであった。フォスは、民族文学に関してニコライ流[19]の似非合理主義的理解をもっていたのである。彼の息子であるハインリヒは、民俗童話とムゼーウス[20]の童話との関係は、骸骨とダンネッカー[21]のシラー像との関係と同じだと感じた。しかし、素朴、子どもらしい、自然なという言

葉は、実際の話、日常茶飯事に属するものなのであろう。老フォスは、アルニムとブレンターノの民謡収集を、「いくつかの古臭い教会賛美歌と一緒に我々の目の前にぶちまけた、鼻垂らし小僧の、ありとあらゆる汚い、反抗的な無用の流行歌の救いがたいごたまぜ」と呼んだのであった。フォスは、常に意図的な悪意を想定していたので、ここにおいても、自分たちにとって良いと思われる場合には、敢えて自らの意志によって民謡の変更や補足をしたことを全く包み隠さなかったアルニムとブレンターノを、詐欺師として非難した。さらにフォスは、彼らの作品を、「悪ふざけの改竄ばかりの、がらくたの山、それどころか、拙劣な自作さえ詰め込んだもの」と呼んだのである。

アルニムは、最も長きに亙ってフォスの朴訥さを信頼してきただけに、これには一層憤慨し、攻撃するフォスの根も葉もない誹謗中傷による主張を、高飛車な非難の言葉で叱責した。そして、ことのほか真剣に、フォスが古代の教会歌を「ロマン主義者が、その主なる神に捧げる歌」と題して、次のようにもじったことを非難したのであった。

主よ、我は喜んでかくあり続けん。
今の我のままに、御身の憐れな忠犬は。

ロマン主義者たちの小さな群れは、クロイツァーを除けば、すでにハイデルベルクを去っていた。が、そのときデンマーク人のバガズン[22]が、ここに一時期定住して、その機知と活発な才能をフォスのかなり荒削りな天分と合体させ、「ロマンチックなぺてんを用いる腕白小僧」の「未熟で可愛い流行（はやり）のおしゃべり」に対して、公の嘲笑を発した。バガズンが一八一〇年にテュービンゲンのコッタ社から出版した嘲笑詩選集『石榴石（ざくろ）、あるいは呼び鈴年鑑（りん）、完成したロマン主義者と新進の神秘主義者たちのためのポケット・ブック』は、若いロマン主義者たちが自分たちの敵対者に対して浴びせた奇妙に

婉曲的で、苦心して考え出された嘲笑揶揄よりもはるかに機知のある、正鵠を射たものであった。たとえ、大いなる内的確信をもってロマン主義者たちの味方をするとしても、やはり、この悪漢ソネットの快い冗談に出会うと、一緒に笑ってしまわざるをえない。その作者たちは、敵対者たちの傷つきやすい面を――ひょっとして、作者たちがその深い意味を理解していなかった、まさにそのせいかも知れないが――、素早く臭ぎつけて、悪意からというよりは、楽しみのために、扱う内容に益々つられて、滑稽なまでに誇張した形で描いている。

対立する両極を結合するというロマン主義の逆説、この結合の射程が学問的原理であることを、フォスは把握していなかったのである。しかし、このことは彼にとって、鸚鵡のように口真似するロマン主義の信奉者や学徒がその逆説を乱用したのと同じように、ナンセンスであることは明白であった。ロマン主義の逆説を、次の「疑惑と信仰と信頼」というソネットが適切に表現している。

孫娘が先祖を産めようか？
肉体のもつ光が精神の闇から生じえようか？
牛糞が一体、石榴石に変じえようか？
過去が未来となって永遠に続きえようか？

かく汝は問う――されば、理解せぬのですか？
神々の美酒がキクヂシャから作られ、蜂蜜がカブからできることを。
糸巻き竿を操る、天使を宿す処女が、

アスパラガスの頭と麦の穂からできることを。

古き創造と新たなる深淵に感謝あれ、
神なくとも、汝は永遠に神々しく信仰できよう、
絶望に満たされしとも、絶えず陽気に希望を抱けよう。

たとえ、創造主御自らが極楽往生永眠せしとも、
その聞こえぬ音色は、耳の聞こえぬ者たちを喜ばせよう。
石榴石の門は永遠に開きしゆえ。

同じように愉快な方法で、恐怖小説が次の詩の中で風刺されている。この詩の表題は、「月の光に照らされた冬の夕暮れの感動」となっている。

彼方の僧院の壁は、なんと悲しげな光を放つことよ！
我が体内の血は、不安に騒いでならぬ、
一万一千の処女たちが血を流すさまを見るごとく、
半ば生まれし天使の啜り泣きを聞くがごとく。

また我には思われん、教会の窓々が、尋常ならざる
幽霊の炎で輝きてあらんと。
見張りの角笛の音が、塔の上より虚ろに響きくる。
墓地の地中の納骨室から立ち昇るかのごとく。

とうの昔に朽ち果てし、高僧たちの脆き亡骸が、
信徒たちの髑髏の傍らで揺れん。
星辰は、死神のまごうかたなき鎌のごとく見えん。

あらゆる魂が死んだごとく、我には思われん。
かしこでは若者も乙女もなり果てん、
骸骨のお化けの、白い雪の上に映る全き影のごとく。

この種の攻撃を、フモールと洞察力のある人間であれば、恐らく甘受したことであろう。しかし、この感じのよい弓矢のお返しとして、ロマン主義者たちは徐々に頑丈な武器、鞭、棍棒を用いるようになった。ありとあらゆる手段が用いられ、フォスの不機嫌は極めて激しい怨恨にまで高まったのである。『呼び鈴年鑑』が出版された同じ年に、ゲレスによる『アジア世界の神話史』と、クロイツァーによる『象徴学』の第一巻が出版された。これらの書物は、オリエントの宗教文化とヨーロッパの宗教文化との関連に関する見解が明確に展開されたものであった。『象徴学』は、ハイデルベルクに

おいて自らがすでに重鎮となり、フォスの学問的見解を完全に凌駕していたクロイツァーの名声を、今や一層広めることとなった。若者たちが雪崩を打って敵対者の側につき、これがために彼ら自身が身の破滅を早めるさまを傍観せざるをえなかったゆえに、この老教育者フォスは憤慨したのである。しかしながら、これらの事柄は、差し当たりナポレオンの失脚とドイツの動乱という政治的な大事件に遭遇して、色あせたのであった。これは、ロマン主義者たちにとっては栄光の時代であった。自分たちの見解は非ドイツ的となじられたにもかかわらず、彼らは、危機の時代にあって祖国の名を勇気をもって公言したのであった。これに反し、老フォスは一八〇五年に、ナポレオンを冗談交じりに「我らが同盟者」と呼び、彼の息子ハインリヒは、イェーナ会戦の後にこう書いたのである。「一旦こういう事態になったからには、フランス人がさらなる勝利を収め、早く平和になることを心から願う」と。

しかしながら、勝利の感激が消えたり、醜い内紛が始まると、昔ながらの争点に政治的な対立が加わり、これが敵愾心に燃える人々を毒してしまったのである。一八一九年にバーデン州の議会が開かれると、そこにおける主要な役割は、自由主義の党に委ねられた。これに属していたのはフォスとパウルスで、パウルスは一八一一年以来、ハイデルベルク大学の教授を務めていた。クロイツァーと、ロマン主義の考えをもつ宗教家ダウプ[23]は、反対の党を支持した。今や、実践問題がテーマとなり、具体的な目標が重要となったので、敵対者に邪悪な意図を擦りつけるというフォスの習性は、いよいよもって地歩を得たのであった。つまりフォスは、クロイツァーとダウプは、自由主義的革新のために現体制が転覆するのを見たくないがため、彼らは、民衆が衆愚化と奴隷制にあえいでいた「ヒルデブラントの司教座聖堂参事会時代」を再興しようとする「僧侶及び従士の青年隊」の一員となっている、と言ったのである。他方、クロイツァーも幾分憤慨して、こう書いた。「フォスは今や、自ら宗教と国家を作ろうとする、ご立派な同業組合の一員となっている」と。

ロマン主義は、この頃あらゆる領域において無敵であったがゆえに、フォスは光明と分別を救うために、なにかしら手

荒なことを企てねばならないと考え、その標的として老シュトルベルク伯爵[24]を選んで、この人物に見られる僧侶気質の鈍感な曖昧さ」と同時に、仇敵を破滅させようと目論だのであった。シュトルベルクは、彼自身の言うところによれば、「鍛冶の神ウルカヌスは、自分にヤスリは拒んだものの、炎は授けてくれた」のだが、その年齢と性格からしてロマン派の時代ではなく、シュトゥルム・ウント・ドラングの時代に属していた。青年ボワスレー[25]は、このシュトルベルクをゲーテ[26]との対話の中で、カトリックに改宗したプロテスタント教徒たちの中の英雄と呼んだ。これに対してゲーテは、「そうです。あの人の中には溢れる人間性が、偉大な心情、天性が具わっています。子どものいたずらと見えるものでさえ、本来的な人間性に溢れていることを示しています」と応えたのである。にもかかわらず、ひょっとして自分たちとは全く違った人間であるという、まさにそのゆえかも知れないが、カトリック教徒となったロマン主義者たちは、一八〇〇年に行なわれた彼の宗旨変えによって一連の改宗の契機を作った、この高貴にして愛すべき老人を尊敬したのであった。アーダム・ミュラーは、自分の「官報」に時代精神に関する論文を寄稿するよう、シュトルベルクを促した。実際、シュトルベルクの宗教史は、動揺していた人々に少なからぬ影響を与えたのであった。

僧侶気質との戦いに利用された機関誌は、パウルスによって発行された『警句』(Sophronizon)という雑誌であった。ここに、パウルス自身によって書かれたシュトルベルクの宗教史への批判と、一八一九年にはフォスの悪評高い論文「いかにしてフリッツ・シュトルベルクは不自由身分の人となりしか」が載ったのである。ここに見られる誹謗中傷の信仰心のない粗暴さは、プロテスタントの同志にすら嘆かれ、ひどく非難されたのである。粗暴さによって至る所で生み出された胸苦しい印象を一層強めたのは、その後間もなく起こるシュトルベルクの死であった。思いがけぬ卒中が彼の晩年に、すでに暗い影を落としていた。ひとえに他人の非難と自己の良心の呵責に堪えるために、フォスは思わず知らず益々激しく、「最大の危機が近づいており、ドイツは推測通りの反啓蒙主義同盟によって深刻な危険に曝されている」という考え

の中へのめり込んでいったのである。ペルテスは、フォスがシュトルベルクを攻撃した論文の、クラウディウス[27]に関係する意見に触れて、訓戒を公にする決心を固めた。この訓戒にフォスとパウルスは、ペルテス[28]はカトリック教プロパガンダの道具であり、救世主・伝道金庫からお金をもらっているという中傷によって応えたのであった。

一八一九年は、明確に際立った特色をもった年であった。反対派の若者たちは激しく反発したが――不運な学生ザントは、コッツェブー[29]を殺害したのである――、ロマン派は、なおも調停という品位のある高い水準を維持していた。秋にゲレスが、その断固たる民衆擁護の政策ゆえにプロイセン政府から迫害されてフランスへ逃れ、追放の身で次のように書いた。「若者たちは、旧制度への憎悪の中で成長してゆく。ならず者や愚か者たちは、その憎悪から身を守ろうとして群れに分かれ、日一日とその憎悪の正当さを証明しているのだ」と。ゲレスの『ドイツと革命』は、同じ年に出版されたが、これは諸政党の極めて雄大な展望が得られる模範的書物であった。にもかかわらずゲンツ[30]は、ゲレスの『巨大鵞ペン』から新たな確信を、彼自身の言葉によれば、「呑み込んだ」後、勝ち誇って――というのも、「彼は、この獅子を手なずけること」に、はるか以前から野望をもっていたからであるが――、こう書いたのである。「概して言えば、ゲレスは我々の掌中にあり、我々から逃れることはできない。民主主義と共に彼は、今や永遠に破滅した」と。

およそ一八二〇年頃に、ロマン派に老化の兆候が現れ始め、あちこちに老化による衰弱が見られるようになり、新たな世代がロマン派を背景へと追いやるのである。若者の常として、彼らは、自分たちになんらかの理解を示すような年配者たちとは関わり合いにならないものである。若者は、自分たちは年配者たちとはなんら共通するところがないことを示そうとして強い態度に出るが、すると、年配者たちの方も、これまたそういう食い違いを悟って、苦々しさと反感を覚えて退くのである。一八二二年にまずクロイツァーが、大学で教授たちは神秘主義者の集団と物理屋の集団に分かれ、後者の集団はフォスやパウルスと素晴らしい関係にあって、「極端この上もない経験的方法を玉座に据えようとしている」と述

べた。憎悪に満たされたロマン派の敵対者たちが、他でもないロマン派の人々が栄光と重要性を付与した物理学という言葉を標榜したことは、なんと奇妙なことであろうか！

J・J・ヴァーグナー[31]は、一八一九年に、次のような正当な見解を述べた。「自然哲学によって見る目を与えられた自然科学者たちは今や、まるでその目を初めから自分でもっていたかのように用い始めたが、その目によって得られた発見を、まるで哲学者など必要としないかのように、面と向かって鼻にかけている」と。

五感によって知覚されるもののみが評価に値するという見解が、若者の間で定着している今となって、ゲレスは、二十年前に市民的な形式で挙げた自分の結婚を、遅れ馳せながらもう一度教会で執り行なったのである。

すでに駆逐されてはいたものの、もちろん外部に向かっては威勢よく見え、上層部からは以前にも増して保護を受けていた敵対者たちの背後にあって、フォスは反象徴学という重火砲を雷のごとく撃ち放っていた。息子ハインリヒの死によって陰鬱になっていた老フォスは、自分の辛辣で、学生めいた豪語によって書き上げた書物の中に、積年の恨みを爆発させたのである。この自分の敵対者全員に重火砲を浴びせるために、フォスはこの書物の中で象徴学の起源を、亡き文献学者のハイネに遡らせた。ハイネはフォスの先生であって、彼はこのハイネと最初の喧嘩をしていたのであった。「ナイル河の汚穢から太陽が虫をわかせるように、現代のハイネ＝ヘルマン流象徴学[32]から、クロイツァーの象徴学という害虫がインド宗教の陽光に当たって生まれたが、これはむかつくような虫けらの群れだ。一切合切が腐敗から出たものだ。」「変装者」にして「熱狂的サンキュロット党員」のゲレスがこれに応じて、その宗教は、上部アジアから出て、「インド人の聖母が生んだ詐欺的似非キリストである」クリシュナ神が、未来の救世主という考えを明示したインドを通じて、最後にゴート人の聖堂に入り込んだものであると教えたのであった。フォスは、「冷酷で淫蕩な東洋人」と、インドのバッカス神を、「もうもうたる神話の煙で夢うつつとなり、自分を信ずる敬虔な人々をも煙に巻く、この目の赤い無頼漢シヴァ＝ディオ

ニュソスを」したたかに罵っている。生殖能力の旺盛な牡牛は、まさにこの特性のゆえに神性の象徴となり、さらに、太陽と蓮の花も神性の象徴となるという考えを、フォスは愚かしく下劣なものと見なし、「インドの太古の黎明期に生まれ、西方へと光り輝き進む太陽のごとき牡牛ディオニュソスを、インドにおける太古の幽霊」と呼んで茶化そうとしたのであった。「あの熱狂的象徴主義者は、なにかしら牛らしきものを認めれば、たちまちその牛の尻を追いかけ、後の尻尾をつかまえて、最近の時代から太古の神秘的な洞窟の闇へと引きずり込むのであろう。」ついにフォスは、クロイツァーを不潔な男と呼んで憚らなかった。というのもクロイツァーは、旺盛な繁殖力の象徴を指摘して、「球状の牛糞から生まれた神秘的な黄金虫を、太陽と繁殖力と輪廻転生の汚い形象」として解釈したからである。

クロイツァーは、自分の名声が色あせたことをこの攻撃のせいにしたのであった。彼はゲレスに宛てて、「今や、すべてがフォスの完全に新鮮な反象徴学に満ちています。学生たちは、すでに物理屋たちの所へ殺到し始めました。彼らは非常に忙しいのに、神秘主義者たちは暇です」と書き送った。彼の反論は、かなり繊細なものであったが、フォスの著書ほど機知のきいたものでも、元気のいいものでもなかった。それにしても、こういったことは、一切が最早重要なものではなかったのである。つまり、フォスは二年後に死に、しかし、かといってクロイツァーの名声は、やはり戻らなかったのである。彼は、自分が嫌われ軽蔑されたと感じ始めた。象形文字学は、今や党派の関心事となり、空想や心情、素晴らしい推理と哲学は、ついに〈密輸品〉として扱われていると、クロイツァーは友人たちに伝えている。また、「実際今日では、俗人たちが自由主義的愚昧さで嘲笑することなしには、尊敬すべきことや古代の事柄について最早語られることはありません。物理学者たちは、自分たちが世界の統治者であると思っています。また、ティーデマン[33]は、最近ある講演の中で、経験に則した自然科学以外には、学問などというものはないのであり、鰐の死体の中にある一つの新しい涙腺を発見したことは、人間精神の最高の勝利である、と表明しているのです」と伝えている。彼は、こう嘆いている。「大学のこ

とを心配すべき枢密顧問官たちですら、諸々の研究の相対的価値という完全に北アメリカ的理念をもっております。一切合切が、益々実践と現実に向かっているのです。私の神話学の講義には、今までで最も少ない聴講生しかおりません。」

ロマン派は、ミュンヒェンで比較的長く続いた。この地でロマン派は、ルートヴィヒ一世の即位と共に、いよいよもって本来の意味で王座に就けられたのであった。芸術ばかりではなく、学問をも首都ミュンヒェンに土着のものとして根付けさせるために、ルートヴィヒ一世は、古い大学をランツフートからミュンヒェンに移し、この大学へ次々と国民的思想家たちを招聘した。つまり、フランス人の治世下にあって彼を支持したゲレス、シューベルト、[34]リングザイス、[35]シェリングといった人々である。一八二八年に、ゲレス、シェリング、シューベルトは、最も多い聴講生を獲得した。しかし、新たな時代と新たな学問の脅威は、シューベルトに次いで自然科学の代表者となったオーケン[36]その人において認められるようになったのである。

オーケンは自然哲学者であったので、この限りにおいて彼は、もともとロマン派から離れていなかった。しかしオーケンは、若きシェリングの汎神論的傾向を発展させ、しかもその考えを、当初それがほとんど隣接していた宗教から益々離し、その後のフォークト[37]やビューヒナー[38]のような物質主義者へと続く形で発展させたのである。一八一九年にオーケンが、『イシス』誌上に、地上の生物界全体、そして人間も、原初の海を満たしていた原始的粘液から生じたという主張を提出したとき、当時すでに敬虔主義者になっていた考古学者カンネ[39]は、その主張の中に大きな危険を、すなわち「自然科学の明るい朝の天空を曇らせる暗雲」を察知したのである。カンネは、友人であるシューベルトにこう説明した。「このように、現代の自然科学は、やがて精神が神を想起する観念をも、脳の血から採取された第二の原始的粘液から派生させるでありましょう。現代の自然科学は、勝手気ままに登場し、こう公言するでありましょう。神も魂も存在せず、一切はあれこれと形を変えたに過ぎない海の泡であって、その形態は死によって再び泡となり分解するのだ、と。」

シューベルトは、当時それほど躊躇していなかったとしても、後になってオーケンと並んで教鞭を取ることによって、やはり不安にさせられたのであった。というのも、オーケンの見解は、益々シューベルトの考えと相容れなくなっていたが、にもかかわらず、総じてオーケンが若者を自分の味方につけていたからである。実際即座に、その契機からすれば重要でない些細な敵対感情が生まれた。しかしこれは、聴講生たちが党派に分かれて扇動することによって増幅され、不快なものとなったのである。シューベルトは、こう語っている。「つまり、目下このミュンヒェンでは、その形態と応用において、恐らく他所には類例を見ない文学がある。いくつかの、いわゆる大衆新聞が街にあって、種々の表題で発行され、人々はこれらをチーズ紙と呼ぶのが慣わしになっている。というのも、読んだ後に人々は、それでもってチーズを包んでビアホールへもって行くからである。それらの新聞が、大多数の人々の間で最も好まれ、一般に普及して、例の文学を形作っているのだ。」これらの新聞の中でシューベルトは、ひどく酷評された。このことによって、ミュンヒェンにおける最初の数年間は、それとは反対の側から友情と尊敬を受けたにもかかわらず、辛いものとなり、彼の重い病を誘発させる原因ともなった。年若い王子や王女までをも彼に教育させていた国王から、シューベルトは庇護を受けていた。オーケンのエアランゲン大学への転任によって、その不愉快な論争に決着がつけられるはずであった。ただしオーケンは、発令されたチューリヒへの招聘に従う方を選んだのである。

他のロマン主義者たちは、シューベルトに劣らず、敵の攻撃に堪えねばならなかった。

誠実なリングザイスには、身分制議会における、ある自由主義派の敵対者によって――自由主義派は、なんといっても、ことのほか悪口に長けていたのだが――勲章を付けた骸骨、罪悪と腐敗の象徴、神秘主義的詐欺師、黴びて腐った妖怪、医学を学んだ毒殺者にして敬虔ぶった山師、大学が陥っているクレチン病の標本と、要するに、この上もなく侮辱的な呼称が使われたのである。革命と共に、ロマン派の正式な終焉が近づいた。一八四八年にゲレスが死んだとき、教養のある

自由主義的ドイツ人たちは、困窮の時代にあって彼を以前から信頼の眼差しで見ていたのであったが、学生たちが彼のために催そうとした松明行列の計画は警察によって妨害され、アカデミーにおける彼に捧げる追悼講演は阻止されてしまったのである。

多くの打撃に対してロマン派は、若い力が残っている限り、抵抗したのであった。次第にロマン派の努力は水泡に帰し、ロマン派の人々は、年老い、場合によっては子どもっぽく馬鹿げた態度を示すようになった。ついに、ロマン派は最早戦いを挑まれずに、精々通りすがりに嘲笑されるようになってしまった。つい最近に至るまで、ロマン的という言葉が本来なにを意味しているのか知られておらず、その言葉によって無造作に、非実践的なもの、不明瞭なもの、本当でないものを指していたのである。一八六九年にオーヴァーベック[40]が死んだとき、すでにベックリーン[41]は最初のロマン主義的傑作を描き上げてしまっていたと聞くと、人は奇妙な感動を覚える。一八八〇年に入ってから、リングザイスは死ぬ。このとき、ロマン主義が再びまた、ほとんど現代的なものとなり始める時代がきていたのである。度重なる革命と戦争が、かすかな詩的素質を踏みにじってしまっていた。読者の中でロマン派に関して生き残っていたものは、捨てても惜しくはないものばかりだったのである。フリードリヒ・シュレーゲルは、その人気の無さをなんと苦々しく嘆いていたことであろうか！よくあることだが、模倣者たちが、ようやくロマン主義を人気あるものとしたのである。彼らは、新たな刻印を押された諸々の理念と形象を空にし、これらを引き伸ばし、自分たちの発明した薄い布切れで飾り立てたのである。ロマン主義の理念内容と中世を結び付けることは必ずしも必要ではなかったし、また、本質的なことでもなかった。しかし今や人々は、隠者や城、騎士の奥方がその中に出てくるときに、物語や詩はロマン主義的なものであると信じたのである。同様に、恐怖を喚起するものや幽霊の登場、さらに、異国情緒の溢れるものが、ロマン主義の目印となった。実際、ポケット・ブックや年鑑は、こういった題材に満ちていた。かつてコッツェブーの戯曲を楽しみ感動した人々が、今度はフケー[42]の味気な

い馬鹿げた騎士団や、運命悲劇における父親の呪いやらジプシーの予言の効果に籠絡された、恐怖の操り人形に熱狂したのである。十九世紀半ばには恐らく、ヤロミーアの「そうとも、俺なのさ、おまえは不運な女だ、おまえがその名を呼んだのは、この俺なのだ」という詩句を諳じていない教養人は、ほとんどいなかったであろう。ゲーテから評価され上演されたヴェルナー[43]の『二月二十四日』は、一層残虐で浅薄なミュルナー[44]の駄作によって、その成功という点では凌駕され、最も好まれたのは、フーヴァルト[45]の下らないおしゃべりから成る代物であった。この気立てのよい正直な人間フーヴァルトは、観客の熱狂的歓迎にいたく感激した。ティーク[46]は、ベルリーンにおける新たな劇場の開幕に当たって『ホンブルク王子』[47]を推薦したが、しかし、当代のベストセラーであるフーヴァルトの『肖像』が選ばれたのであった。これらの後期ロマン派の物語や詩において、我々はなおも精選され熟慮された語調を聞き取るが、これは、シュトゥルム・ウント・ドラングの時代におけるような挑戦的に描きなぐられた、明滅するような語調とは非常に快い対照を成している。しかし、その背後に内面性というものがないので、その語調は、まやかしで、無力な妖怪じみた印象しか与えない。

「我々は皆、他になりようがなかったのだろうか。この我々の不様な姿はなんだ!」という言葉が、死に臨んだブレンターノの嘆きであったと言われる。この言葉は、個々の多くのロマン主義者とその運動一般に当てはめられるものである。ロマン派は、登場したとき希望と豊かさと確信に満ち、あらゆる分野で量り知れないほど沢山の刺激をもたらした。しかし、至る所で種子を播いた反面、ロマン派は、なんら成熟した作品の形では記念碑を打ち建てなかったのである。新たな敵対的時代は、有限なものを崇拝したが、この有限性の欠如が、無限性の芸術家たちがその作品と共に四散してしまった原因であった。限定によって強められ、新たな世代の人々は、確かに汚れ歪められてはいるものの、やはり、絶えず崇高な理想に再び目を向けることができるのである。かのロマン主義者たちが遠くの昔に指し示していた、その理想に。

注

この翻訳の底本は、》Ricarda Huch: Die Romantik — Blütezeit, Ausbreitung und Verfall —. Rainer Wunderlich Verlag Hermann Leins, Tübingen 1951, S.642-659.《である。

(1) ユスティーヌス・ケルナー（Justinus Kerner, 1786-1862）。ドイツはルートヴィヒスブルク生まれの詩人。一八一九年以降、公立病院医長としてケルナーは、ヴァインスベルクに住み、ある女性夢遊病患者を診察した。シュヴァーベン地方のロマン派における重要な抒情詩人の一人である。代表作には、『旅影』（Die Reiseschatten, 1811）、『プレーフォルストの女視霊者』（Die Seherin von Prevorst, 1829）等がある。

(2) シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854）。ドイツはヴュルテンブルク地方のレーオンベルク生まれの哲学者。ヘーゲルとF・ヘルダーリンと共にテュービンゲンの神学校で学んだ。一七九八年ゲーテに招かれて、イェーナ大学の教授となる。ここで、ロマン派の人々と親交を結ぶ。一八〇三年カロリーネ・ミヒャエーリスと結婚。その後、ヴュルツブルク大学、エアランゲン大学、ミュンヒェン大学、ベルリーン大学の教授を務めた。

フィヒテの哲学から出発し、自然哲学並び芸術哲学の試みにならって、絶対的観念論の体系を企図した。ここにおいて、精神と自然、主体と客体等の対立は絶対的なものにあっては区別されず、ただ絶対的なものの発展においてのみ、対立したものに分けて説明される（「同一性哲学」）。この考えは、最終的には宗教哲学へと移行した。その目的は、神の認識をその作用から引き出そうとするものであった。ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）やベルグソン（Henri Bergson, 1859-1941）等へ影響を与えた。代表的著書には、『自然哲学考』（Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797）、『超越論的観念論の体系』（System des transcendentalen Idealismus, 1800）、『人間的自由の本質（Philosoph. Untersuchungen über das Wesen der menschl. Freiheit, 1809）等がある。

(3) ヴィルヘルム・シュレーゲル（August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845）。ドイツはハノーファー生まれの文芸史家。弟のフリードリヒと共に雑誌「アテネーウム」を発行した。代表作には、『文学と芸術に関する講義（Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst, 1884）、『ドイツ言語・文芸の歴史』（Geschichte der deutschen Sprache und Poesie, 1913）等がある。ボン大学でドイツ文芸史担当の教授であった。

フリードリヒ・シュレーゲル（Friedrich von Schlegel, 1772-1829）。ドイツはハノーファー生まれの評論家。ロマン派の文芸理論を構築した。兄（August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845）と共に雑誌「アテネーウム」を発行した。代表作には、『インド人の言語と叡知について』（Über die Sprache und Weisheit der Inder, 1808）、『古代及び近代文学史講義』（Vorlesungen über die Geschichte der alten und neuen Literatur, 1815）等がある。

（4）パウルス（Heinrich Eberhard Gottlob Paulus, 1761-1851）。ドイツはレーオンベルク生まれのプロテスタント宗教学者。イェーナ大学でオリエント語の教授（一七八九年）、宗教学の教授（一七九三―九四年）、ハイデルベルク大学教授（一八一一年）となった。彼は、合理主義の代表者であった。代表的著書には、『新訳聖書に関する文献批判学的注釈』（Philo. krit. Commentar über das N.S., 4 Bde., 1800-04）、『キリストの生涯』（Das Leben Jesu, 2 Bde., 1828）、『我が教養と生涯の歴史に関する素描』（Skizzen aus meiner Bildungs- und Lebensgeschichte, 1839）がある。

（5）フォス（Johann Heinrich Voß, 1751-1826）。ドイツはメクレンブルクに近いゾンマーストルフ生まれの詩人・翻訳家。学生の頃、H・Chr・ボワイエの仲介で「ゲッティンゲン林苑同盟」の会員となり、一七七五年「ゲッティンゲン文芸年鑑」の共同編集者として、一七七六―一八〇〇年まで発行した。一七七八年にはオッテンドルフの校長、一七八二年にはオイティーンの校長を務めた。民間学者として一八〇二年以降イェーナに、そして、一八〇五年以降ハイデルベルクに暮らした。彼本来の詩的業績は、高地ドイツ語及び方言による写実的で自然に密着した田園詩［『七〇歳の誕生日』（一七八一年）、牧師館叙事詩『ルイーゼ』（一七八二―八四年）］にある。当時彼は、とりわけホメロスの翻訳者として［『オデュッセイア』（一七八一年）、『イーリアス』（一七九三年）］かなり重要な存在であった。オヴィディウス、ヴェルギリウス、ホラチウス、ヘシオドス、アリストファネスの翻訳において彼は、原典のもつ韻律と言葉に極力忠実に翻訳するよう努力した。自分の息子たちと共に彼は、その晩年にかけてシェイクスピア演劇の翻訳を（九巻、一八一八―二九年）企てた。その合理主義的態度によって彼は、あらゆる種類の狂信主義とロマン主義の敵対者となった。この態度を示すものは、Ch・G・ハイネに対して書かれた『神話学書簡』（二巻、一七九四年）、『反象徴学』（二巻、一八二四―二六年、F・クロイツァーに対抗して）、とりわけ彼のかつての友人であるF・L・シュトルベルク伯爵のカトリック改宗を理由に、伯爵と公に行なわれた絶交［『いかにしてフリッツ・シュトルベルクは不自由身分の人となりしか？』（一八一九年、『警句』所収）、『シュトルベルクの陰謀の証明』（一八二〇年）］であった。

（6）クロイツァー（Georg Friedrich Creuzer, 1771-1858）。ドイツはマールブルク生まれの古典文献学者。マールブルク、ライデ

ン、ハイデルベルクで大学教授を務めた。代表的著書には、『古代民族、とりわけギリシア人の神話学と象徴学』（四巻、一八一〇―一二年）がある。この書物は、シェリング、ヘーゲル、バッハオーフェンに重大な影響を与えた。

（7）ブレンターノ（Clemens Maria Brentano, 1778-1842）。ドイツはエーレンブライトシュタイン生まれのロマン派の詩人。代表作には、アルニムと協力して編集した童話集『少年の魔法の角笛』（Des Knaben Wunderhorn, 1806-08）、『けなげなカスパールと美しいアンナールの物語』（Geschichte vom braven Kasperl und schönen Annerl, 1817）、『ゴッケル物語』（Gockel, Hinkel und Gackeleia, 1938）等がある。妹のベッティーナは、アルニムと結婚した。

（8）アルニム（Achim Arnim, 1781-1831）。ドイツはベルリーン生まれのロマン派の詩人。ブレンターノと協力して童話集『少年の魔法の角笛』を編集した。

（9）ゲレス（Johann Joseph von Görres, 1776-1848）。ドイツはコーブレンツ生まれのロマン派のジャーナリスト・学者・政治家。ブレンターノとアルニムが発行していた「隠者新聞」に協力した。「ライン・メルクーア」の編集発行人でもあった。

（10）パサヴァン（Johann David Passavant, 1787-1861）。ドイツはフランクフルト・アム・マイン生まれの芸術史家・画家。最初は商人であったが、後に画家となった。一八四〇年以降、フランクフルトのシュテーデル研究所視学官を務める。代表的作品・著書には、『ウルビーノのラファエルとその父G・サンティ』（Raffael von Urbino und sein Vater G.Santi, 1839-58）、『イギリス、ベルギー芸術旅行』（Kunstreise durch England und Belgien, 1833）等がある。

（11）ミュラー（Adam Heinrich Müller, Ritter von Nittersdorff, 1779-1829）。ドイツはベルリーン生まれの国家・社会理論家。家庭教師を務めた後、一八〇五年にカトリック教徒となり、H・v・クライストと共に一八〇八年、芸術文芸誌『日輪』（Phöbus）を発行した。一八〇九―一一年に彼は、ベルリーンのクーアマルク騎士階級の秘書となり、ハルデンベルクによる改革の敵対者となった。一八一三年以降オーストリアの国家公務員となり、F・シュレーゲルと接触した。一八一五年にはメッテルニヒの随行員として、ウィーンに在住した。ミュラーは、ロマン主義的国家・社会理論の最も重要な代表者であり、有機的にしてカトリック教的・普遍主義的国家観を起草した。

（12）ヴィーラント（Christoph Martin Wieland, 1733-1813）。ドイツはビーベラハ生まれの小説家。ロココ風の作品を書いた。彼の『アーガトン物語』（Die Geschichte des Agathon, 1766-67）は、心理小説・教養小説の先駆的作品と言われる。その他の代表作には、『ロザルヴァのドン・シルヴィオの冒険』（Die Abenteuer des Don Sylvio von Rosalva, 1764）、『アプデラの人々』

(Die Abderiten, 1774)、『オーベロン』(Oberon, 1780) 等がある。

(13) シュッツ (Wilhelm von Schütz, 1776-1847)。ドイツはベルリーン生まれの作家。ロマン主義の演劇家で、後にはむしろ出版と編集の活動を行なった(一八四二-四五年、カトリック教の雑誌「アンティツェルズス」[Anticelsus] を編集した)。

(14) ユング=シュティリング (Johann Heinrich Jung, 1740-1817)。ドイツはグルント(ヒルヒェンバッハ付近)生まれの作家。厳格な敬虔主義の家庭の出身で、一七六九-七二年までシュトラースブルクで医学を学び、ここでゲーテと交友を結び、その後エーバーフェルトで医者となり(白内障の手術で有名になった)、一七七八年にカイザースラウテルンで経済学と官房学の教授となった。一七八四年にはハイデルベルク大学教授、一七八七年にはマールブルク大学教授となり、最終的にはカールスルーエに在住した。彼は、敬虔で子どもらしい心情によって自分の青春時代を描写したが、その第一部をゲーテが改作して『ヘンリヒ・シュティリングの青春』(一七七七年)として出版した。続巻(四巻、一七七八-一八一七年)は、かなり強い宗教的思想によって彩られている。彼は、長編小説や詩、神秘的・敬虔主義的にして心霊主義的な書物を著した。彼は、晩年ヘルンフート同胞教会の一員となった。

(15) ラーヴァーター (Johann Kasper Lavater, 1741-1801)。スイスはチューリヒ生まれの観相家。シュトゥルム・ウント・ドラング時代には、ヘルダーやゲーテと親交を結んだ。人体の顔や頭蓋骨の特徴に魂が刻印付けられているという彼の説は、当時の観相学に重要な刺激を与えた。彼はメスメリズムともかかわった。代表的著書には、『人間の知識と愛を促進するための観相学的断章』(Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe, 4 Bde., 1775-78) 等がある。

(16) カント (Immanuel Kant, 1724-1804)。ドイツはケーニヒスベルク生まれの哲学者。啓蒙主義思潮を克服し、認識能力の批判を根本に据えた批判哲学を創立した近世哲学の祖。世界連盟に基づく平和を最高原理とし、人間の進歩を人間の義務とする倫理観、美を道徳的イデーのシンボルと見なす芸術観は、シラーやクライスト、ハイネ等に影響を与えた。代表的著書には、『純粋理性批判』(Kritik der reinen Vernunft, 1781)、『実践理性批判』(Kritik der praktischen Vernunft, 1788)、『判断力批判』(Kritik der Urteilskraft, 1790) 等がある。

(17) フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)。ドイツはラメラウ生まれの哲学者。イェーナ大学、エアランゲン大学、ベルリーン大学の教授を務めた。カント哲学から出発し、純粋主観的観念論によって、自我の独立を主張し、一切の外面世界は、自我の創造物として存在するという「絶対的自我の哲学」を打ち立てた。

ベルリーンでシュレーゲル兄弟、ティーク、シュライヤーマハー等と親交を結び、ロマン派の人々の文学観に大きな影響を与えた。シュレーゲルのロマン的イロニーやノヴァーリスの魔術的観念論は、フィヒテの絶対自我哲学の影響を受けたものである。代表的著書には、『全知識学の基礎』(Grundlage der gesamten Wissenschaften, 1794/95) がある。

(18) ホメロス (dt. Homer, grch. Homeros, lat. Homerus)。紀元八世紀において、ギリシアはイオニア地方の小アジアに実在した。文献学においては長い間虚構上の人物であると見なされていたが、現在では歴史上の人物として認められている。その人物像には、伝説を通じて、遍歴する盲目の吟遊詩人という特徴が付与された。古代ギリシアの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』の作者と言われている。

(19) ニコライ流の、ニコライ (Christoph Friedrich Nicolai, 1733-1811)。ドイツはベルリーン生まれの作家・書籍出版販売者。彼は一七五八年にニコライ書籍販売店の運営を引継ぎ、ベルリーンにおける啓蒙主義的思想の中心的世話人となった。ニコライの最良の成果は、G・E・レッシングとM・メンデルスゾーンとの共同作業から生まれた(友人との共同で創立した『芸術学とリベラルアーツのための図書』[Bibliothek der schönen Wiss. und der freyen Künste. 12 Bde., 1757-58]、『最新の文学に関する書簡』[Briefe, die Neueste Literatur betreffend. 24 Bde., 1756-65])。ニコライは、シュトゥルム・ドランクと古典主義、ロマン主義の文学を拒否し、風刺的パロディーによる闘争文書において、ヘルダーやゲーテ、シラー、カント、フィヒテを攻撃した。ゲーテの『ウェルテル』に対しては『若きウェルテルの喜び』(一七七五年) というパロディーで、敬虔主義と感傷主義、教会の教義に対しては『ゼバルドゥス・ノートアンカー先生の生涯とご意見』(Leben und Meinungen des Herrn Magisters Sebaldus Nothanker. 3 Bde., 1773-76) という長編小説で、カントの哲学に対しては『ある太った男の伝記』(Lebensgeschichte eines dicken Mannes, 2 Bde., 1794) という長編小説と、『あるドイツの哲学者ゼンプローニウス・グンディベルトの生涯とご意見』(Leben und Meinungen Sempronius Gundibert's, eines dt. Philosophen, 1798) という長編小説で、さらには、『哲学論文』(Philosophische Abhandlungen, 2 Bde., 1808) で攻撃した。

(20) ムゼーウス (Johann Karl August Musäus, 1735-1787)。ドイツはヴァイマル生まれの作家。彼は、風刺的長編小説を書いた。代表作には、『グランディソン二世』(Grandison der Zweite, 3 Bde., 1760-62)、『骨相学旅行』(Physiognomische Reisen, 1778/79)、啓蒙主義の精神で書かれた『ドイツ人の民俗童話』(Volksmärchen der Deutschen, 5 Bde., 1782-86) がある。

(21) ダンネッカー（Johann Heinrich von Dannecker, 1758-1841）。ドイツはシュトゥットガルト生まれの彫刻家。一八二八年にシュトゥットガルト芸術学院の院長となる。ドイツ古典主義の重要な代表者。とりわけ、シラーの胸像（一七九四年）や宗教的人物像、神話の人物像を制作した。

(22) バガズン（Jens Immanuel Baggesen, 1764-1826）。デンマークはコルセール生まれの作家。デンマーク語とドイツ語で著作活動し、とりわけシラーと親交があった。デンマークのロマン主義に対する敵対者であった。風刺的で滑稽な作品を書いた。『迷宮』（Das Labyrinth, 1792/93）という興味深い旅行記を書いた。

(23) ダウプ（Karl Daub, 1763-1836）。現代プロテスタンティズムの思弁的神学の代表者。貧しい両親のもとに生まれ、マールブルクの哲学者ティーデマン（Tiedemann）の家に引き取られる。一七六三年来マールブルク大学で哲学と神学を学び、一七九一年以降講師を務めた。一七九四年ハーナウの官立高等師範学校哲学教授、一七九六年ハイデルベルク大学神学教授となった。当初カント哲学を信奉したが、まもなくシェリングの影響を受け、クロイツァーと協力して、ロマン派の思弁的学問を代表することとなった。その後、ヘーゲルがハイデルベルク大学へ招聘されると、ヘーゲル哲学の影響を受けることとなった。ダウプは、そのかなり重苦しい内容で、今では時代遅れとなった著作によってというよりは、その類い希なる威厳をもった人間的態度によって、影響を与えた。主要な著書には、『神学論』（Theologumena, 1806）、『教理神学研究序説』（Einleitung in das Studium der Dogmatik, 1810）等がある。

(24) シュトルベルク（Friedrich Leopold Graf zu Stolberg, 1750-1819）。ドイツはブラームシュテット生まれの詩人。兄のクリスティアンと共に、一七七六年まで学問と文芸的関心を分かち合った。ゲーテとの友情によって文芸への関心が高まり、彼はF・G・クロップシュトックやM・クラウディウス、J・G・ハーマン、F・H・ヤコービ、J・G・ヘルダーを中心に作られたサークルに加わった。一八〇〇年に彼は、カトリック教へ改宗した。彼は、自由と祖国、暴君への憎悪に関する革命的な歌から活動を開始し、やがて『イーリアス』を翻訳した。その他、『ドイツ、スイス、イタリア、シチリア旅行記』（四巻、一七九一―九二年）がある。

(25) ボワスレー（Melchior Boisserée, 1786-1851）。ドイツはケルン生まれの美術研究家・美術収集家。彼は、弟であるズルピッツと共同でケルンで、後にはハイデルベルクでドイツ中世美術を研究した。彼らの収集物を、とりわけゲーテが大いに評価したが、それらを一八二七年にバイエルンのルートヴィヒ一世がミュンヒェンのアルテ・ピナコテークのために購入した。

(26) ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）。ドイツはフランクフルト生まれの文豪。シラーと共にドイツ古典主義時代を築き上げた。代表作には、『若きウェルテルの悩み』（Die Leiden des jungen Werthers, 1774）、『ファウスト』（Faust, 1808, 1832）、『トルクワト・タッソー』（Torquato Tasso, 1790）、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（Wilhelm Meisters Lehrjahre, 1795-96）等がある。

(27) クラウディウス（Matthias Claudius, 1740-1815）。ドイツはラインフェルト生まれの詩人。イェーナ大学で学び、ヴァンツベックで一七七一年から七五年まで、J・J・ボーデによって創立された地方新聞「ヴァンツベックの使者」を発行した。彼は、その教育論と省察において、とりわけ叙情詩において独自の深みのある心情と子どもらしい調子を打ち出した（夕べの歌「月は昇りぬ」）。彼は、アスムス（Asmus）というペンネームで活動した。

(28) ペルテス（Friedrich Christoph Perthes, 1772-1843）。ドイツはルードルフシュタット生まれの書籍販売業者・出版者。一七九六年に、J・H・ベッサーと共にハンブルクで書籍販売店を開業した。これは、ドイツで最初の書籍取次販売業と見なされる。一八二二年に、ゴータで出版社を創立したが、この会社は、彼の息子のフリードリヒ・アンドレーアス・ペルテスの名前で運営された。この会社は、一九二二年にドイツ出版協会（シュトゥットガルト）と統合された。彼は、M・クラウディウスの娘と結婚した。

(29) コッツェブー（August von Kotzebue, 1761-1819）。ドイツはヴァイマル生まれの演劇家。一七八一―九〇年ロシアの国家公務員を務め、一七九七―九九年に、ウィーン劇場付詩人となった。その後、ヴァイマルとザンクト・ペテルブルクに住み、一八〇三―〇六年にベルリーンで雑誌『直言居士』（Der Freimütige）の編集者となった。ケーニヒスベルクに在住して、雑誌『蜜蜂』（Biene, 1808-10）と『コオロギ』（Die Grille, 1811-12）によってナポレオンと戦った。彼はその『文芸週刊新聞』（Liter. Wochenblatt, 1818-19）で、学生組合の自由主義的思想と愛国主義的理想をからかったために、ドイツの統一と自由に対する敵と見なされた。イェーナの学生組合員であるK・L・ザントが彼を刺殺した。コッツェブーは、A・W・イフラントと並んで、同時代の舞台を席巻する娯楽演劇家であった（二〇〇以上の演劇を書いた）。舞台効果に対する確かな勘に恵まれていたので、彼は演劇的・感傷的家庭描写［『人間憎悪と後悔』（Menschenhaß und Reue, 1789）によって、古い騎士演劇を駆逐した。最も好評を博したものは、彼の喜劇［『二人のクリングスベルク』（Die beiden Klingsberg, 1801）、『ドイツの小市民たち』（Die deutschen Kleinstädter, 1803）であった。

(30) ゲンツ（Friedrich von Gentz, 1764-1832）。ドイツはブレスラウ生まれのジャーナリスト。一七八五年にロシアの国家公務員となった。最初フランス革命を歓迎したが、しかし、E・バークの『フランス革命省察』（Reflections on the revolution in France）の翻訳（一七九三年）を通じて、革命的思想の敵対者となった。彼は、オーストリアとプロイセンの協調に尽力した。そこにおける彼の目的は、ドイツ国家の統一というよりは、ナポレオン一世に対抗する戦いとヨーロッパの安定の回復であった。一八〇二年に彼はウィーンへ行き、保守的・復古主義的原則を擁護する最も重要なジャーナリストとなった。

(31) ヴァーグナー（Johann Jakob Wagner）。ジャン・パウルと共に、カンネの援助者であった。著書には、『哲学と医学について、両学問の先駆者』（Von der Philosophie und der Medizin, ein Prodromus für beide Studien. Bamberg 1805）、『相関関係において考察せる宗教、学問、芸術、国家』（Religion, Wissenschaft, Kunst, und Staat in ihren gegenseitigen Verhältnissen betrachtet. Erlangen 1819）等がある。

(32) ハイネ＝ヘルマン流。ハイネ（Christian Gottlob Heyne, 1729-1812）。ドイツはケムニッツ生まれの古典文献学者。一七六三年以降ゲッティンゲン大学教授。彼の著作と講義は、古代のあらゆる分野、とりわけ神話、美術、文化史に亙っていた。主著には、『学術小論集』（Opuscula academica, 6 Bde., 1785-1812）、『ウェルギリウス注釈版』（Erklärende Ausg. des Vergil, 4 Bde., 1775）、『イーリアス』（Der Ilias, 1802）等がある。

ヘルマン（Gottfried Hermann, 1772-1847）。ドイツはライプツィヒ生まれの古典文献学者。一七九八年以降ライプツィヒ大学教授。優れた言語能力によって彼の歴史批判版（ホメロスや古代悲劇作家）は、テキスト批判における最高の業績となった。イギリスやオランダの学派で継続されることによってハイネは、文献学の言語・テキスト批判の研究を完成させた。学派の指導者として彼は、文化史の文献学者たち（A. Boeckh）と対決した。彼は、一時期ゲーテと親交を結んだ（エウリピデスの『タウリス島のイフィゲーニエ』への序文、一八三三年）。主著には、『ギリシア文法理論の改善について』（De emendenda ratione Graecae grammaticae, 1801）、『バッコス神の祭り』（Orphica, 1805）、『韻律学要綱』（Elementa doctrinae metricae, 1816）。

(33) ティーデマン（Dietrich Tiedemann, 1748-1803）。ドイツはブレーマーフェールデ生まれの哲学者。一七八六年にマールブルク大学で哲学とギリシア語の教授となった。彼は、幼児心理学の創始者と見なされている。主要な著書には、『人間研究』（Untersuchungen über den Menschen, 3 Bde., 1777/78）、『幼児における心的能力の発達に関する考察』（Beobachtungen

über die Entwicklung der Seelenfähigkeiten bei Kindern, 1787)、『タレースからバークレイに至る思弁哲学の精神』(Geist der spekulat. Philos. von Thales bis Berkeley, 6 Bde., 1791-97) がある。

(34) ゴットヒルフ・シューベルト (Gotthilf Heinrich von Schubert, 1780-1860)。ドイツはホーエンシュタイン生まれの自然科学者・哲学者。エアランゲン大学、ミュンヒェン大学の教授を務めた。世界全体の有機的な法則性を前提とする自然哲学及び歴史哲学を発展させた。その思想は、ドイツ・ロマン派に大きな影響を与えた。代表的著書には、『自然科学の夜の側面についての見解』(Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft, 1808) がある。

(35) リングザイス (Johann Nepomuk von Ringseis, 1785-1880)。ドイツはオーバープファルツ地方のシュヴァルツホーフェン生まれの医師。ルートヴィヒ一世の侍医で、ミュンヒェン大学教授も務めた。彼は、ロマン主義的意味において医学を超越的なものと結び付け、病気の根源は罪の中にありとした。主要な著書には、『医学の体系』(System der Medizin, 1841) がある。

(36) オーケン (Lorenz Oken [本来は、Ockenfuß], 1779-1851)。ドイツはオッフェンブルク生まれの自然科学者・哲学者。イェーナ大学、ミュンヒェン大学、チューリヒ大学教授を務めた。百科全書派的雑誌である「イシス」の(一八一七-四三年)の創始者にして、編集者であった。オーケンは、自然哲学の主要課題は、世界の発達要因を、区別された序列の形で体系的に説明することにあると考えた。主要な著書には、『感覚組織の延長としての宇宙について』(Über das Universum als Fortsetzung des Sinnensystems, 1808)、『自然哲学体系の手引き』(Lehrbuch des Systems der Naturphilosophie, 1809-11) 等がある。

(37) フォークト (Nils Collet Vogt, 1864-1937)。ノルウェーの抒情詩人・作家・劇作家。フォークトは、上層市民階級出身の技師の息子として生まれた。すでにギムナージウム時代に政治活動を始め、様々な雑誌の寄稿者となっていた。一八八四年に彼は、オスロ大学で法律学を学び、ジャーナリストとなった。一八九四年に結婚。一八九九年、二度目のイタリア旅行。一九二〇年、パリ旅行。自然主義文学運動の結果として、熱狂的な、社会革命志向の愛国的抒情詩人となった。後には、一層曖昧で、思想色の強い詩を書き、暗くて憂うつな自然抒情詩を書いた。彼の感動と誠実さが結び付いて、明澄で男性的な文体を生み出している。文化史的に見て興味深い自伝的長編小説においても、市民階級批判が見られる。著作には、『家庭の憂い』(Familiens Sorg, 1889)、『テレーゼ』(Therese, 1914)、『カーニバル』(Karneval, 1920) 等がある。

(38) ビューヒナー (Georg Büchner, 1813-1837)。ドイツはヘッセンのダルムシュタット近郊にあるゴッデルアウ生まれの劇作家。無神論者の外科医である父親と文学好きの母親の長男として生まれた。シュトラースブルク大学で医学を学び、その後ギーセン大

学で哲学と臨床医学を学んだ。三六年スイスのチューリヒ大学で学位を取り、同大学の講師となったが、翌年二月チフスに罹って急逝した。代表作には、『ダントンの死』(Dantons Tod, 1835)、『レオンスとレーナ』(Leonce und Lena, 1842)、『ヴォイツェク』(Woyzeck, 1879)等がある。

(39) カンネ(Joh. Arnold Kanne, 1773-1824)。当時の、いわゆる政治記者の一人。彼の同志は、クロイツァーとゲレスであった。動乱の時代そのものにふさわしいような、冒険に富む破天荒な人生を送った。ベーゲマン(Begemann)という名の村教師と説教師パサヴァン(Ludwig Passavant)が、この才能のある少年を下層市民階級から引き出して、彼に教育を授け、出世の道を切り開いてやった。また同様に、カンネの遍歴時代にあっては、ジャン・パウルやJ・J・ヴァーグナー教授が、彼の幸運の支えであり、道案内人であった。これらの援助者たちが、カンネの著書の出版を手伝ったり、彼をオーストリア軍の兵役から身請けし、彼に全うな職を手配したりした。一八〇九年に、ニュルンベルクの実業学校歴史教授の職に就いた。結婚したが、うまくゆかず、一八一七年にニュルンベルクのギムナージウム文献学教授、一八一九年にエアランゲン大学で東洋語の教授となった。彼は、実名以外でも著作活動を続け、ヴァルター・ベルギウス(Walter Bergius)、ヨハネス・アウトーア(Johannes Author)、アントーン・フォン・プロイセン(Anton von Preußen)というペンネームを用いた。一八二四年に、エアランゲンでその波乱に富んだ人生を終えた。主要な著書には、『ギリシア・ローマ神話の新提示』(Neue Darstellung der Mythologie der Griechen und Römer, 1805)、『最古の自然哲学のパンテオン』(Pantheum der ältesten Naturphilosophie, die Religion aller Völker, 1811)等がある。

(40) オーヴァーベック(Johann Friedrich Overbeck, 1789-1869)。ドイツはリューベック生まれの画家。一八〇九年にウィーンにおけるアカデミーの生徒としてF・プフォルらと共にルーカス同盟を創設し、一八一〇年以降ナザレ派画家の指導者としてローマに在住した。ナザレ派の画家たちと共に彼は、カサ・バルトルディ(Casa Bartholdy)のフレスコ画(一八一六-一七年)とヴィラ・マッシモ(Villa Massimo)の「タッソーの部屋」(一八一七-二七年)を創った。彼は、とりわけペルジーノと若きラファエルに触発されて、新鮮な自然感情と繊細な感覚によって絵やデッサンを創作した。彼の芸術は、後に硬直化して、宗教的ドグマに規定された理想を追求するものとなった。

(41) ベックリーン(Arnold Böcklin, 1827-1901)。スイスはバーゼル生まれの画家。デュッセルドルフにおいてI・W・シルマーの弟子となり、ヴァイマル、ミュンヒェン、スイス、イタリアで活動した。彼は、一八六〇年代に独自の様式に到達し、伝説や文

学によって触発された幻想を、明確な形態と光度の強い色彩によって表現した。彼の絵の大半は、神々や想像上の生物が登場する南国の風景を描写している。代表作には、『ケンタウロスの戦い』(Kentaurenkampf, 1873)、『トリトンとネレイデス』(Triton und Nereide, 1882)、『波の戯れ』(Spiel der Wellen, 1883)、『アトリエでの自画像』(Selbstbildnis im Atelier, 1893)、『ペスト』(Die Pest, 1898) 等がある。

(42) フケー (Friedrich de la Motte Fouqué, 1777-1843)。ドイツはブランデンブルク生まれのフランス系貴族出身の軍人・作家。代表作には、童話風短編小説『ウンディーネ』(Undine, 1811) がある。ホフマンが、この作品をオペラ化した。

(43) ヴェルナー (Zacharias Werner, 1768 -1823)。ドイツはケーニヒスベルク生まれの劇作家・カトリックの説教師。E・T・A・ホフマンやA・W・シュレーゲルを初めとし、ロマン派の人々との親交、また、ゲーテやスタール夫人との交際があった。代表作には、『谷間の息子たち』(Die Söhne des Tals, 1803)、『バルト海の十字架』(Das Kreuz an der Ostsee, 1806)、『マルティーン・ルター、またの名を力の厳粛さ』(Martin Luther oder die Weihe der Kraft, 1807)、『アッティラ、またの名をフン族の王』(Attila, König der Hunnen, 1808)、『二月二十四日』(Der 24. Februar, 1815) 等がある。

(44) ミュルナー (Adolf Müllner, 1774-1829)。ドイツはヴァイセンフェルス近郊のランゲンドルフ生まれの劇作家。運命悲劇を書いた。代表作には、『近親相姦』(Der Incest, 1799)、『二月二十九日』(Der 29. Februar, 1812)、『罪』(Die Schuld, 1816) 等がある。

(45) フーヴァルト (Christoph Ernst Frhr. von Houwald, 1778-1845)。ドイツはシュトラウピッツ生まれの作家。運命悲劇の主たる代表者。代表作には、『肖像画』(Das Bild, 1821)、『敵』(Die Feinde, 1825) 等がある。

(46) ティーク (Johann Ludwig Tieck, 1773-1853)。ドイツはベルリーン生まれのロマン派の作家。「ロマン派の王」と呼ばれた。代表作には、『ウィリアム・ラヴェル氏の物語』(Geschichte des Herrn William Lovell, 1795-96)、『長靴を履いた牡猫』(Der gestiefelte Kater, 1797)、『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』(Franz Sternbalds Wanderungen, 1798)、『ツェルビーノ王子』(Prinz Zerbino, 1799) 等がある。

(47) 『ホンブルク王子』。クライストの作品。(Heinrich von Kleist, 1777-1811)。ドイツはオーダー河畔のフランクフルト生まれの劇作家。ドイツ古典主義とロマン主義の時代に活躍したが、ベルリーンのヴァン・ゼー湖畔で心中自殺を遂げた。代表作には、『アンフィトリオン』(Amphitryon, 1807)、『ペンテジレーア』(Penthesilea, 1808)、『こわれがめ』(Der zerbrochene Krug,

1808)、『ハイルブロンのケートヒェン』(Das Kätchen von Heilbronn, 1808)、『ホンブルクの公子』(Prinz Friedrich von Homburg, 1821) 等がある。

〔なお、この翻訳は、鹿児島地区ゲルマニストの有志によって一九八一年より始められた読書会の成果でもあることを、ここに銘記しておく。〕